150年の時を越えて 絹が結ぶ日仏交流物語

取材・文 World Heritage Academy NPO法人 世界遺産アカデミー 客員研究員 飯島 一隆

1872年、日本は明治維新からほどなくして群馬県富岡市に官営の富岡製糸場が誕生する。設立に携わり計画、建設、操業のすべてに携わったのはフランスのドローム県ブール・ド・ペアージュ市出身のPaul Brunat（ポール・ブリュナ）。ドローム県は、世界遺産「リヨン歴史地区」を含むローヌ県南方に位置し、両県はフランスにおける絹産業の歴史の中心地である。

時を経て2014年に富岡製糸場は世界遺産に登録され、翌年に富岡市とブール・ド・ペアージュ市は友好都市協定を締結、さらに富岡市とリヨン市双方で文化交流イベントが実施される。そしてその裏舞台では、ローヌ県に隣接するアン県で、閉鎖していた一つの銅工場が2022年に生まれ変わり、再び脚光を浴びていた。

日本とフランス、双方の絹に関わる歴史が、150年を経て再び動き出す―その大きなきっかけを生んだ、（一財）自治体国際化協会（クレア）パリ事務所に富岡市から派遣された稲塚広美氏と、彼女が帰国後に国際交流員として招聘されたダミアン・ロブション氏に話を伺った。

セルドン
銅工場における
富岡製糸場に関する展示（アン県セルドン村）

日本の絹産業とフランスの技術移転

―― 日本における絹産業の歴史は紀元前まで遡るほど古く、養蚕や織物の技術が発達していく中で、江戸時代には日本各地で養蚕が盛んになり日本の絹織物文化が確立したと認識しています。その後、特に明治以降の日本とフランスの絹産業の歴史について教えてください。

日本の絹産業は、特に幕末期において養蚕技術の進歩は目覚ましいものがありましたが、養蚕から製糸、さらに絹織物に至るまでの生産工程は、なお農家単位で行われる家内制手工業や問屋制家内工業に依存していました。そのため、生産量および品質の両面において、世界的にみれば高水準にあったとは言えない段階であったと認識しています。

一方この時代、フランス国内ではリヨンにおけるジャカード織機の発明など産業革命が進み、特にリヨンは、近隣県が養蚕や生糸の生産地であったことなどから、フランス最大の絹織物の産地として発展していました。しかしナポレオン三世の時代は、フランスやイタリア等西洋では、蚕の伝染病が蔓延し、絹産業は壊滅的な状況にありました。

そこでフランスはアジアに目を向けたわけですが、中国は内戦など情勢が不安定だったこともあり日本に白羽の矢が立ったのです。日本の養蚕や製糸の技術を向上させることが出来れば、フランス国内の絹産業を大きく支えるかもしれない、と。

1858年に日仏修好通商条約が調印され日仏の外交関係が樹立し、翌年には横浜港が開港となる中、ブリュナはリヨンに本社を置く商社の社員であり、そして生糸の検査官として横浜支店で勤務することになります。日本政府は殖産興業の一環として絹産

業を発展させるべく、1870年（明治3年）にブリュナと5年間の雇用契約を結び、日本初の模範器械製糸工場を造ることになります。それが現在の富岡製糸場です。ここで作られた生糸はのちにアメリカ等にも輸出されますが、当初はすべてリヨンに輸出されました。

なお、こうした発展には、養蚕や蚕室構造の技術革新を支えた「田島弥平旧宅」や技術教育も行った「高山社跡」、蚕種の貯蔵を担った天然の保冷庫「荒船風穴」といった、世界遺産の他の構成資産においても、それぞれ大きな進歩があった事も重要な要素ですし、もともと上州（群馬）では、かかあ天下と呼ばれたように、女性が養蚕から機織りに至るすべての過程で活躍していた背景も大きな影響を与えたでしょう。

―― 幕末から明治にかけて、すでに日本とフランスは国レベルの重要な貿易パートナーだったのですね。次に「富岡製糸場」の歴史についても教えていただけますか。

ブリュナは、特に湿気の少ない内陸部を中心に各地を回り、横浜から遠くなく、養蚕が盛んだったことなど諸条件が揃っていた富岡市に工場建設を決めました。私たちは彼の生まれ故郷を訪問したことがありますが、富岡製糸場の南に流れる鏑川と妙義山を含む山々の景色と重なる部分がありました。もしかしたら、ブリュナもどこか故郷に似ているというノスタルジックな気持ちになったかもしれません。

富岡製糸場の設立は、正面から入って最初に目にする東置繭所のアーチ中央のキーストーンに彫られているように、明治5年（1872年）です。

ブリュナは、自身と家族の住まう住居（現首長館）やフランス人指導者の住居（女工館）、ここで働く日本人女性たちの寄宿舎や病院等も造りました。こうした工場という働く場であるとともに生活の場でもあったことは、当時の日本では画期的な労働形態であったことを示しています。木造建築が連なる日本の農村風景の中に突如として見慣れない日本最大級の煉瓦造りの工場がそびえたのですから、設立当初に居たフランス人たちが赤ワインを飲む姿を見て、「フランス人は生き血を飲む」という噂が流れたほど、当時の近隣住民が、その異様な雰囲気に戸惑いを覚えたとしても不思議ではありません。

▲富岡市とブール・ド・ペアージュ市 友好都市協定

こうした背景もあって、当初は日本人労働者を探すことが困難だったようですが、初代工場長が自身の娘を率先して働かせるなどして、全国各地から工女が集まり、日本人によって操業が続けられました。

官営として約20年稼働した後、1893（明治26）年に三井家に払い下げられ、1902（明治35）年に原合名会社に譲渡、1938（昭和13）年には株式会社富岡製糸所として独立、1939（昭和14）年に片倉製糸紡績株式会社（現・片倉工業株式会社）に合併するなど、民営の期間を経て、1987（昭和62）年3月に操業停止に至りました。2005年に富岡市の所有となって以降は文化財として保存管理されていきます。そして、操業当初の建造物である繰糸所、東置繭所、西置繭所の3棟は、平成26年（2014年）12月に国宝に指定されました。

再び紡がれる
日本とフランスの文化交流

―― 創業から100年の時を経た1972年、NHKがプール・ド・ペアージュ市を取材したことをきっかけに、富岡製糸場設立100年を記念したメダルが同市に寄贈されたと知りました。その後の両国・両市における関係はどうなったのでしょうか。

（稲塚氏）「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録推進活動の一環として、2008年に富岡シルクブランド協議会が設立されました。リヨンで開催されているフランス最大のシルクマーケットに2008年、2009年にフランス国外として初めて出展する機会に恵まれ、当時の担当職員が富岡シルクのアピールを行いました。また、2008年は日仏交流150周年記念の年でもあり、富岡市民の参加者を募り、富岡市民とリヨン市民との交流事業をリヨン第３区役所で行いました。

私は2009年にクレアに派遣され、東京本部勤務のあと、翌2010年にパリ事務所勤務となり、日本の自治体とフランスの自治体との交流の一翼を担いました。

派遣元である富岡市に関連する業務としては、

▲SOYEUX DESTINS事業　オープニングセレモニーの様子

▲SOYEUX DESTINS事業　講演会

▲SOYEUX DESTINS事業　企画展

2011年５月にロマン市にてロマン＝ブール・ド・ペアージュ遺産保存協会主催の企画展「絹の歴史と富岡製糸場」での講演を依頼され、富岡製糸場の歴史や世界遺産を目指していることなどを発信し、現地の新聞に掲載されました（その講演内容をクレアパリの広報紙に掲載したことをきっかけに、歴史的な発見に繋がります、詳細は後述）。

帰国後は、富岡製糸場課に配属となり、フランス人雇用の必要性を感じクレアのＪＥＴプログラムのフランス人国際交流員の活用に漕ぎ着けました。2013年8月に招聘されたダミアンと共に世界遺産登録に向けた調査や広報等を担当し、2014年6月に富岡製糸場は遂に世界遺産に登録されました。

その後、富岡製糸場世界遺産登録記念事業を外務省と協賛で実施することになり、在リヨン領事事務所と友好都市について相談する中で、ブリュナの生まれ故郷であるブール・ド・ペアージュ市が候補に挙がりました。そして、2015年に日仏交流文化事業「SOYEUX DESTINS（絹が結ぶ縁）」がリヨンで開催されたのを機に、ブール・ド・ペアージュ市と友好都市協定を締結しました。

翌2016年10月には今度は富岡市にて、両市の絹産業に焦点を当てた友好都市協定締結記念事業「ブール・ド・ペアージュ展」を開催しました。

――　お二人のご活躍あっての世界遺産登録と、そして交流文化事業、さらに友好都市へと繋がっていくのですね。2015年と2016年の事業について、もう少し詳しく教えてください。

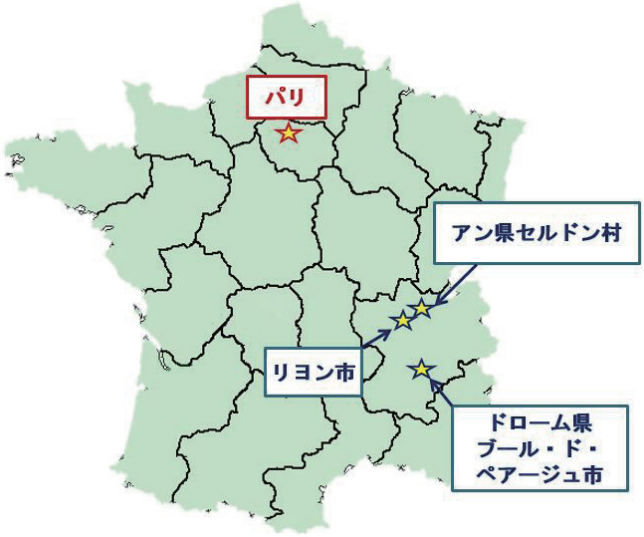
（稲塚氏）2015年の「SOYEUX DESTINS」事業は外務省リヨン領事事務所が主催となり、リヨン市内の複数箇所を会場に実施されました。第４区役所と第６区役所では、日本とフランスの絹の歴史や、最先端の繊維産業、そして隣接するアン県のボネ絹工場やセルドン銅工場に関する展示があり、そして

第２区にあるリヨン商工会議所のジャカールの間では、日仏の歴史学者のChristian Polak氏の講演会、富岡市長もパネリストとして登壇したシンポジウム、リヨン市庁舎での関係者300人を招待して記念レセプションを行う等、官民一体・日仏一丸となって実施したプロジェクトでした。富岡市からは、本市にゆかりのある作家の作品をリヨン織物装飾芸術博物館に展示し、レセプション会場においては日仏交流を描くサンドアートを披露しました。

2016年の「友好都市協定締結記念事業」は、富岡製糸場東置繭所にて、ブリュナの関連資料をはじめ、ブール・ド・ペアージュ市の主要産業であったフェルト帽子にまつわる資料の展示を行いました。また、アン県のセルドン銅工場から借用した、富岡製糸場への繰糸器の部品供給等に関する1871年の契約書原本等を展示するなど、ブール・ド・ペアージュ市だけでなくその周辺にもフォーカスしてフランスの絹産業を伝えました。

―― 繰糸器の部品供給等に関する契約書をアン県のセルドン銅工場から借用したというのは、どういう経緯なのでしょうか。

（稲塚氏）先ほど述べたロマン市での講演の最後に「日本には“運命の赤い糸”という表現があるが、富岡市とフランスは“運命の白い絹の糸”で結ばれていると思う。富岡製糸場は、まだ解明されていないことがたくさんあるので、何か情報がありましたらお寄せください」と伝えました。当時担当していたクレアパリの広報誌に富岡市特集を組み、その講演内容を掲載し、フランス国内の市町村に送付しました。帰国後しばらくして、その広報誌を読んだというアン県セルドン村の銅工場の元従業員から「明治



▲フランス本土におけるリヨン市と近隣自治体の位置関係

▲左端がロブション氏、右端が稲塚氏。ブール・ド・ペアージュ市長（稲塚氏の隣）と議員に富岡市立美術博物館を案内

時代の富岡製糸場操業時にフランスから取り寄せたという繰糸器はうちの銅工場が製造したものではないか」という連絡があったのです。

そこで翌年来日したダミアンにお願いして、セルドン村や銅工場とのやりとりを進めてもらいました。すると調べていくうちに1871年に契約した300の銅釜の繰糸器の部品供給と、富岡における組み立て作業員の派遣に関する契約書の原本がセルドン村の銅工場に存在することが判明したのです。

（ロブション氏）セルドン銅工場は1854年に創業したのち、1979年に操業停止、その後は動態展示をしながら見学者を受け入れていたものの、来訪者の減少により2010年に閉館となっていたそうです。ところが、「SOYEUX DESTINS」の企画展に出展したことがきっかけで、銅工場がアン県の県議会に注目されます。富岡製糸場が世界遺産に登録されたのならばこの銅工場も注目されるであろうと、その後近代的な博物館として整備され、2022年に新たに開業したのです。そこでは富岡製糸場に関する展示もされています。

―― フランスの技術によって造られた富岡製糸場が世界遺産に登録され、またそれによって技術の源泉の一部であったセルドン村の銅工場が再興するなんて、まさに絹が繋いだお話ですね！

富岡製糸場の次なる100年に向けて

―― 稲塚さんは富岡市出身と伺いましたが、ぜひ地域住民のお一人として、世界遺産に登録されて感じること、変わったことについてお聞かせください。

（稲塚氏）私が子供の頃は、富岡製糸場は片倉工業という民間企業の工場で中には入れませんでしたが、自転車で前を通ると繭のにおいがしていました。地

元の人から見たら働く場、工場であったわけですから世界遺産になるとは夢にも思っていなかった市民が多かったのではないかと思います。他方、退職校長会が中心となり解説を始め、この歴史的価値を理解している人たちも熱心に研究や普及活動を進め、もしかしたらいけるのではないかと日に日に期待が高まっていきました。

それまでは富岡市出身と言っても、どこ？何県？と聞かれていたのが、富岡製糸場が世界遺産に登録されたことによって説明しなくてもこの地域や絹産業のことを思い浮かべる人が増えたと思います。同様に、この地域に生まれ育ったことを誇りに思う市民も確実に増えたと思います。

一方、世界遺産登録を控えていた頃の場内の整備状況は観光客を受け入れるには追いついておらず、駐車場やトイレに関する苦情はかなりありました。国の史跡で重要文化財ですから整備するにも多くの調査を踏まえる必要があり、修繕には時間も費用もかかります。世界遺産登録時には1日1万人以上の来場で大混雑となり、加えて非公開部分も多く十分なおもてなしができず課題が山積していましたが、現在は工事も進み見学場所も拡大されつつありますので何度訪問しても楽しめると思います。例えば2015年に整備に着工し、2020年に竣工した国宝 西置繭所は、１階の内部が全面ガラス張の展示室となり、煉瓦造りの外壁を傷めずに、かつ夏でも冷房が効いた中で内部から展示物として見学することができ、ミニコンサートなど新たな活用も始まっています。

こうした整備を経て、来訪者が様々な情報ツールで学び、伝えられる場になったことは世界遺産登録のおかげかなと思います。東京から近い産業遺産です。軽井沢へ行く途中にぜひ立ち寄っていただきたいですね。

―― 西置繭所の整備は、「近代産業遺産の先駆的保存活用プロジェクト」として、2020年に富岡市は日本イコモス賞を受賞されていますね。国際的な文化財修復理念に適う一貫性のある修理方針が取られ、新規挿入部分も優れたデザインでまとめられていると評価されたようです。ロブションさんは世界遺産登録の前年に来日されていますが、その後の変化はいかが感じられますか。

▼新たな活用が期待される国宝 西置繭所の内部
（日本イコモス賞受賞）

（ロブション氏）世界遺産に登録された当初は特に来訪者が増え、それこそ入場に行列ができるほどの混雑ぶりでした。富岡製糸場の内部では、語り部となるガイドの育成に始まり、今ではイヤフォンガイドも整備されています。ガイドの養成講座も当初は高齢者が多かったのですが、今では主婦や若い人が増えました。

街も大きく変わりましたね。景観整備のため電柱が地中化され、道の幅員も拡大され、また上州富岡駅から周遊電動バスが走行するようになりました。駅からの道中には土産店や飲食店等が出来て活性化し、綺麗で活気ある街になったと思います。私が来た当初は、本当に何も無かったのですから。

―― 最後に、現在富岡市観光協会として勤めていらっしゃりますロブションさんから、これから期待される取組や、富岡市を訪れる方々に向けてのメッセージを頂けますでしょうか。

（ロブション氏）富岡市がさらに100年後も発展していくためには、まだまだ解決すべき課題があります。観光振興の面では、宿泊客を増やして地域消費の拡大が必要でしょう。ふるさと納税や高付加価値旅行を通じて得られた収益を文化財保全に繋げていく取組も必要でしょう。また、フランスをはじめとしたインバウンドにも力を入れたい。多くの国の来訪を通じて、富岡の良さ、絹産業の繋がりを広げていきたい。そのため、例えば、富岡製糸場の創業当初に工女が着ていたような着物で街を歩く「クラシカルDe・街あるき」といった体験コンテンツの造成や、最近ではペット同伴で富岡製糸場に入場いただける仕組みの導入等、様々な人が楽しめる環境を用意しています。

これまで関係者が築いてきた日本とフランスの関係を次の100年に繋げるため、絹産業に限らずフランスとの文化交流を大切にしていきたいですね。フランスの中心的な文化としては他にワインやクレープ等、あるいはスポーツの面ではフランス発祥のペタンク等があり、当協会ではこれらを観光客や地域住民に伝えるイベント等も行っています。

富岡製糸場が持つ顕著な普遍的価値を守りつつ、それを支えるために変わり続ける私たち富岡の新たなチャレンジにぜひご期待ください！

◀左：稲塚氏　右：富岡製糸場ブランドブックのモデルとして、ポール・ブリュナに扮するロブション氏

稲塚広美

群馬県富岡市生まれ。富岡製糸場が世界遺産登録を目指す機運の中、2009年4月に富岡市から（一財）自治体国際化協会に派遣され、翌年ユネスコ日本政府代表部のあるパリ事務所に転勤。クレアパリ勤務時に、日本の自治体ではフランス語のニーズがないため、優秀で素晴らしい人材でも採用されないフランス人国際交流員の実態を知り、2012年に帰国後に富岡製糸場課配属となった際にフランス人国際交流員の獲得に尽力し、ダミアン・ロブションを採用するに至る。富岡市世界遺産部富岡製糸場課長など歴任し、現在は富岡市総務部地域づくり課七日市黒川地域づくりセンター長。

編集後記

ブリュナは1840年にブール・ド・ペアージュ市で生まれ、父親と祖父は同市市長を務めた由緒ある家庭だ。父親は市内で養蚕農家を経営し、ドローム県の産業博覧会で銅メダルを受賞。その後同市内やロマン市に紡績工場等を所有するなど、絹産業にも篤い人物だったが、1856以降の財政難等により紡績工場を失い、彼の絹産業に係る遺産はほとんど残されていない。代わりに次世代へと託されたのが息子のポール･ブリュナだったのかも知れない。彼は富岡で功績を残したあとは中国・上海でも功績をあげ、勲章も授与された。詳しくは関連資料に記載した、ロマン＝ペアージュ文化遺産保存協会ウェブサイトを参照されたい。母国に戻ったのが亡くなる直前だったこともあり、ロブション氏曰く、フランス国内では彼の名声はあまり聞かないそうだ。しかし富岡製糸場が世界遺産になり、ブール・ド・ペアージュ市との再交流によって、リヨン市、セルドン銅工場の歴史が再び紐解かれ、ブリュナの活躍や絹産業技術が、各地の誇りになっていることは想像に難くない。取材を通して、稲塚氏とロブション氏がまるで姉弟のように当時の苦労を相互に回顧し、日本人とフランス人が共に同じ未来を見ている様子が、絹糸のように輝いて見えた。

Damien ROBUCHON
（ダミアン・ロブション）

フランス・サルト県サブレ＝シュル＝サルト市出身。日本に関心高く、それまで複数回の来日経験があり、2013年8月にフランス人国際交流員として初めて富岡に住む。最初の印象は、あいにくの雨模様であったにも関わらず「妙義山がまるで水墨画のようでとても美しい景色のあるところだ！」。当初は富岡製糸場の創業に関するブリュナの手紙等のフランス語に関わる資料や、セルドン銅工場とのやり取りに関する翻訳等に従事。2014年6月、カタール・ドーハで開催された世界遺産委員会で「富岡製糸場と絹産業遺産群」が審議される際には、富岡市内で実施したパブリック・ビューイングで同時通訳を務める。2015年の好都市締結の際の通訳も務めた。2020年から（一社）富岡市観光協会にて、観光地域づくりに従事。現在、当協会観光地域づくり特任部長。

関連情報

- **外務省ウェブサイト（絹が結ぶ縁　富岡製糸場とフランス）**
  https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/page24_001077.html
- **外務省在リヨン領事事務所グローカル通信第106号（日本とフランス 絹が結ぶ縁）**
  https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/pdfs/lyon1712.pdf
- **日本イコモスプレスリリース（日本イコモス賞2020）**
- **広報とみおか（特集　富岡製糸場で生まれた日仏交流の絆）**
  https://www.city.tomioka.lg.jp/www/contents/1485830102798/simple/2017-02-p010-011.pdf
- **青弓社出版「産業遺産の社会史 日本とフランスの歴史・文化・課題」共著**
  （第６章　世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」SOYEUX DESTINS 絹が結ぶ縁　稲塚広美）
- **ロマン・ペアージュ文化遺産保存協会ウェブサイト（ポール・ブリュナ：絹の物語）**
  https://romans-patrimoine.fr/paul-brunat-une-histoire-en-soie/

制作：世界遺産検定事務局